韓国再訪 －独立記念館と光州を訪ねて－

高橋　祐吉

「見る」ということ

前回韓国に出かけたのは1993年の春浅い頃だったから、もうあれから15年もの歳月が流れたことになる。社会科学研究所として最初に訪ねた外国で、三星電子水原（スーウォン）工場や浦項製鉄所、現代自動車蔚山（ウルサン）工場などを見学しながら、躍進著しい韓国経済の姿をまのあたりにしたのであったが、当時40代の半ばであった私には、街の匂いや飲み食いしたものはもちろん女性の風貌さえもが物珍しく映っていたはずである。しかしあれから15年も経ってみると、好奇心の衰えは覆いがたく、「どうせ人間みなチョボチョボなのでは」といった口吻がすっかり身につき、そんな筆者のような凡俗かつ卑小な人間が暮らしているところなら、どこもそれほどの違いはなかろうとのいささか「老成」した思いばかりが先に立つようになってしまった。一見すると、「成熟」のように見えなくもないのではあるが…。

できればそうした「成熟」まがいの「老成」から逃れたいと思い、今回の韓国視察への参加を思い立ったのであるが、たとえそんなごくごく私事の思いではあったとしても、そうした心持ちの変化は、日々の暮らしに小さな波紋をゆっくりと広げていく。いつのまにやら訪問先についての情報が目に付くようになったりするのも、そのひとつだろう。探訪記とも回想録とも読書ノートともつかぬこのような雑文を書き始めた時期には、「北」では地下核実験の再開がそして「南」では前大統領盧武鉉の自殺が大きな話題となっていたが、ちょっと真面目に新聞に目をこらしてみると、政治や経済、労働などのマクロの世界については言うまでもないが、ミクロの世界についてもじつにさまざまな報道にあふれていることがわかる。

表音文字ハングルの世界における漢字の「復権」、釜山でのロッテと新世界の百貨店競争、ソウルに開設されることになったエリート養成のための「国際中学」の話題などに加えて、黄晳映（ファン・ソギョン）の新著『パリデギ』の出版（彼の作品集『客地』（岩波書店、1986年）には韓国現代史が刻み込まれており、また『懐かしの庭』（岩波書店、2002 年）では、光州事件をはじめとする80年代の民主化運動の苦悩が描かれている）、韓紙によって立体を包む現代美術家全光栄（チョン・クヮンヨン）の日本での個展開催、在日コリアンと日本の大学生が連携して開催するドキュメンタリー映画祭、韓国の20代非正規労働者の貧困を描いて人文書では異例のベストセラーとなったという禹晳熏（ウ・ソックン）、朴権一（パク・クォニル）の『88万ウォン世代』（明石書店、2009年）の書評と、思いの外に多彩なのである。映画やテレビドラマの世界における韓流ブームや

ＢＢクリーム、ＷＢＣなどとはだいぶ次元を異にした日韓の交流の広がりと深まり、そんなものがあらためて感じられよう。

また、せっかく出かけるのだから予備知識ぐらいは得ておこうなどと、日頃の不勉強にもかかわらず、殊勝にも本を広げ、また映画も観ようなどと思うようにもなる。そこで、まず最初は手頃なところからと、岩波新書の文京洙（ムン・ギョンス）『韓国現代史』(2005 年）と四方田犬彦『ソウルの風景』(2001 年）から読み始めた。前者では、2005 年の「過去史法」(真実・和解のための過去史整理基本法) の成立を踏まえながら、「日本では想像を絶するような波乱に満ちた」韓国現代史が民主化闘争の展開を軸に整理されており、名前だけでほとんど内容を知らなかった済州島四・三事件の経緯とともに、光州事件についても比較的詳しくふれられていてなかなか興味深かったのであるが、より印象に残ったのは後者の『ソウルの風景』であった。韓国に対する予備知識を得ておこうなどといった姿勢そのものが煩わしくなっただけではなく、韓国社会の現実を切り取る感性の鋭さに心惹かれたからである。

四方田は、「70 年代にわたしがソウルで見かけた日本人の多くは、買春観光を目的とした男性たちであったが、今では何の屈託もない若い女性たちのパック旅行が主流になろうとしていた」と述べて、「1988 年のオリンピックの前後に成立した大衆消費社会」がすでに確固たるものとなったことを確認する。その全編に流れる通奏低音は、こうした現実を踏まえて、ステレオタイプ化された韓国「神話」から離れ、「現実に隣人として存在している他者」の日常を曇りなき目で直視せよ、というものである。このような俗世に流通する言葉に変換してしまうと、何とも手垢にまみれた言説のように聞こえるかもしれないが、けっしてそうではない。そこには、定点観測者としての「自負」があり、曇りなき目をもたらしている膨大な「知」があり、その「自負」と「知」による隣人と自己への鋭い「批評」があるからである。本書の圧巻は「聖域となった光州」と「水曜集会」であるが、前者については後にふれることにして、元従軍慰安婦を扱った後者についての一節だけを引用しておこう。

すでに彼女たちの物語を書物とドキュメンタリーフィルムを通して知っていた彼は、「あらゆる物語の枠組みを離れて彼女の顔を見ているだけで十分だった」と述懐しながら、「わたしには安全地帯から元慰安婦たちの物語を操作し、社会のなかに啓蒙的に分配し、その見返りに自分のアイデンティティを確立するという知のシステムは、どうにも馴染むことができそうになかった。ただ自分にできることがあるとすれば、この表象の物語をイデオロギーを離れた角度から眺め、そのシステムを批評的に見つめることだけである」と述べる。彼が馴染むことができそうになかったと語るこうした「知のシステム」に、大学教員としての私などはすっかり馴染んでしまっていたようにも思う。だから、もしも本書を手にしなければ、今回もまたこうした「知のシステム」にすっかりとらわれて、「見たい」と欲するものだけを見て、何かを「見た」

ような気になっていたに違いない。大事なことは、視野を広げて「眺める」ことであり、そして「見る」ことの持続すなわち「見つめる」ことなのだろう。

「生活の細部」にひそむ冥さと哀しさ

しかしそれにしても、こうした興味深い著作を生み出した作者は何者なのか。そんな興味もなぜだか湧いてくる。「老成」はしても、人間に対する好奇心は失われてはいないということなのか。せっかくだからと同じ作者の著作である『われらが＜他者＞なる韓国』（ＰＡＲＣＯ出版局、1987 年）も手にして拾い読みしてみたが、読めば読むほど自分が「現実に隣人として存在している他者」についてなにひとつ知ってはいないことを思い知らされた。すっかりマイナー・ポエット好み、私小説ファンになってしまった私などには、多才で饒舌かつ博覧強記の彼の著作についていくことなどもともと無理な話だったのかもしれない。彼は、1987 年の「民主化宣言」以前にすでに次のように述べていた。「現実の韓国人はけっして伝統文化への矜持や生硬な政治的観念だけを支柱として生きているわけではない。むしろ日本と同じく、いや場合によっては日本以上にダイナミックで猥雑な活気に満ちた環境のなかで、したたかに日々の日常生活の冒険を繰り返している。こうした生活の細部に立ちいろうとせず、巨大な歴史的時間と国際情勢だけを手掛かりに日本の知識人が韓国を説くときしばしば陥ってしまうのは、過度に理想化された道徳的国民としての韓国人の映像であり、それは多くの場合不毛な抽象論の域を出ない」と。

そうなのかもしれない、いやきっとそうなのだろう。こうした文章を読むと、知識人などとはまるで縁遠いくせに、「生活の細部」に立ち入ることなく「巨大な歴史的時間と国際情勢だけを手掛かりに」韓国を見ようとしてきた私などは、すっかり自省の念にとらわれてしまう。「神々は細部に宿る」との箴言が、あらためてゆっくりと体内から立ち上ってくるのを感じるのである。ではどうすれば他者の「生活の細部」に立ち入ることができるのか。私は、ひとりの人間の生理と心理が丁寧に描き込まれた小説や映画を好むが、もしかしたらどこかで、そうしたものを通じて「生活の細部」に立ち入り、生身の人間に触れたいと願っているからなのかもしれない。ごくささやかな映画愛好者でもある私は、この機会に韓国の小説や映画なども鑑賞してみたくなったのであった。

出かける前に観た映画は、『光州 5．18』、『ペパーミント・キャンディー』そして『殺人の追憶』（この映画は娯楽作品として第一級のできばえだったが、こうした映画にも抑圧された 80 年代の臭いが感じられる。監督はポン・ジュノ）である。昨年日本でも公開された『光州 5．18』（原題は陸軍空挺部隊の鎮圧作戦名であった「華麗なる休暇」。監督はキム・ジフン）は題名どおり光州事件そのも

のを描いたものである。私が嫌う映画評論家諸氏のように偉そうに語るならば、メッセージ性が強すぎる通俗的な映画であると言えなくもないのであろうが、事件の重さがそうした高踏的な批評を軽々しく口にするのをいささか躊躇わせる。人ひとりいなくなった深夜の街を走り続けるトラックとそこから聞こえてくる哀切きわまりない街頭放送、銃撃戦で一気に鎮圧されるその悲劇的な結末などは、やはり見続けるのが辛い。

こうした死の「悲しみ」とは違って、人間の「哀しみ」が胸底に静かに沈殿していったのは『ペパーミント・キャンディー』(監督はイ・チャンドン) である。これまで観てきた韓国映画に対して、私は、いささかストレートな感情表現がもたらす鬱陶しいほどの暑苦しさを感じないではなかったが、そうしたものとは異質の感性がこの映画には流れているように思われる。主人公ヨンホの河原での自殺から始まって、ストーリーはさまざまなエピソードを挟みつつ 20 年前の過去へと遡っていく。そして、自殺することになったあの場所で彼は初恋の女性スニムとほほえみながら語らい、ひとり未来を夢見るところでこの映画は終わる。遡っていく過去のところどころに点滅するのは、韓国現代史の闇である。ヨンホは、徴兵時に光州事件の鎮圧作戦に動員され、女子高校生を誤って射殺してしまうのであるが、そのことが彼の人格を破壊し彼をスニムから遠ざけてしまうことになる。彼女から離れ根無し草となってしまったヨンホは、暴力や虚業による蓄財そして不倫の世界に溺れたあげく、人生に虚しさを募らせて自殺へと追い込まれていくのであった。

『ペパーミント・キャンディー』は先の『ソウルの風景』に紹介されており、私はそれでこの映画の存在を初めて知った。四方田はこの映画を「恐ろしく冥い」と評しているが (希望が見えなくて「暗い」のではなく、遮断されてしまっているが故に「冥い」のであろう)、どういうわけなのか私はこうした冥さや哀しさに奇妙な懐かしさを感じた。ところで、「場合によっては日本以上にダイナミックで猥雑な活気に満ちた環境」のなかで「したたか」に生き抜いてきたはずの韓国の人々の「生活の細部」は、何故にかくも冥くそしてまたかくも哀しいのであろうか。「猥雑」も「したたか」も生きることのひとつの形容ではあろうが、そのことが、生きることの内実をどこまで示し得ているのか私にはよくわからない。「大衆消費社会」は、記号としての消費をそれこそ「猥雑」かつ「したたか」に繰り返してはいるが、じつはそうしたことによって、人々が自らの人生の物語を紡いでいくことをかえって難しくしているようにも思われるのである。そうであれば、物語をなくしてしまった冥く哀しい「迷宮」こそが、時代の実相だと言うべきであろうか。

ヨンホという「私」が、「われらが他者」はもちろんのこと「われら」をも惹き付けたのは、四方田の言うように「われわれが今日の大衆消費社会の繁栄を享受し、民主主義の恩恵を受けて暮らしていける背後で、実は無数のヨンホたちが手を汚しながら自己破滅の径を歩んでいた」

からに他ならない。さらに言えば、その破滅の真因は、素朴で、無垢で、純情なものを時代に流されつつ棄ててきた（人間の弱さ故に棄てざるをえなかったのかもしれないのだが…）ところにあったに違いない。それらの懐かしきものの象徴として存在しているのが、初恋の女性スニムなのである。「われら」がミツを棄てたように（遠藤周作の同名の小説を原作に、浦山桐郎は『私が棄てた女』（1969 年）を撮った）、「われらが他者」は初恋の人スニムを棄ててきたのであった。だからこそ、ヨンホは死ぬ間際に「帰りたい!」と叫ばざるをえなかったのだろう。

もしかすると、冥く哀しい「歴史的時間」の痕跡を忘れ去ろうとして、ソウルの繁華街明洞（ミョンドン）通りの夜はけばけばしいまでの眩さに包まれていたのかもしれない。だがその眩さは、5 割近くにも達する非正規労働者の大群によって支えられており、あまりにも危ういものではなかったか（その一端については、雨宮処凛『怒りのソウル』（金曜日、2008 年）や先にふれた『88 万ウォン世代』等を参照されたい）。「大衆消費社会」は豊かな社会ではあったが、しかし他方で、その代償として人間としての感受性を鈍磨させ、剥奪し、喪失させていく危険をともなっているようにも思われる。『ペパーミント・キャンディー』を観ながら私が繰り返し思い出していたのは、88 年に自殺した田宮虎彦が、『足摺岬』や『絵本』、『菊坂』などで繰り返し描いた、生きることの冥さと哀しさである。マネーにまみれきったかのようなわが日本ではとうの昔に忘れ去られてしまい、今では「時代遅れ」となってしまった人間のみが、人生の重さにじっと耐えつつ繰り返し反芻せざるをえなかった冥さと哀しさではあったが…。

独立記念館における「歴史的時間」

今回の韓国再訪に気持ちが動かされたのは、その行程に独立記念館と光州の訪問が組まれていたからである。なぜそのような場所に強く惹き付けられるのか。おそらくそうした所に私にとっての「歴史的時間」が流れていると感じられるからなのであろう。1906 年から始まった統監府による間接支配を含めると、その後 40 年にもわたって日本が植民地として支配し続けた朝鮮は、「他者」ではあるがたんなる「他者」としてあるのではなく、まさに「われらが他者」なのである。そうした意識は、もちろん自生的に芽生えてきたわけではない。高校の世界史の教師は、上原専禄の『日本国民の世界史』（岩波書店、1960 年）をテキストにアジアのなかの日本をしきりに説いていたし、学生運動体験をはじめとした左翼体験を通して、ひととおり現代史を学びもした。

文学を好むような感受性を捨てきれなかったこともあったのか、中野重治の「雨の降る品川駅」（在日の人々と暮らした体験を持つ宮本輝は、『本をつんだ小舟』（文春文庫、1995 年）でこの詩にまつわる思い出を書いている）や槇村浩の「間島パルチザンの歌」（間島とは豆満江流域の通称）に胸騒

ぎのようなものを感じてきたし、先の田宮の『朝鮮ダリア』などにも静かな感銘を覚えた。さらにずっと後になってからであるが、「ただ自分だけの小さな一喜一憂に生きて」きたマイナーな作家小山清の「詩集『朝鮮冬物語』によせて」も目にした。おそらくこんなふうにして、「われらが他者」は「われら」をそして「われ」を映し出す鏡のような存在となっていったのであったろう。

3 月 15 日に訪れた独立記念館は、私の予想を遙かに超える威容を誇っていた。総面積 400 万平方メートルという広大な敷地に立てられたということで、ゲート前にそびえ立つ「民族の塔」をくぐってから展示館のある「民族の家」にたどり着くまでが、かなりの距離だ。この独立記念館は、82 年の歴史教科書問題が発端となって国民からの募金をもとに 87 年 8 月 15 日に開館されたということであるが、全斗煥政権が記念館設立を国民に呼びかけた背景には、80 年の光州事件の後遺症を抱え、反日運動が反政府運動に広がることを極度に恐れていたこともあったという。ナショナリズムの高揚によって、第五共和国はその支配基盤を確実なものとしたかったのであろう。いずれにしても、ここにも光州事件が大きな影を落としていたのである。

この「民族の家」には七つの展示館がある。それぞれ民族伝統館、近代民族運動館、日帝侵略館、三・一運動館、独立戦争館、社会・文化運動館、大韓民国臨時政府館と呼ばれているのであるが、民族伝統館では、秀吉軍と戦った李舜臣（イ・スンシン）が使用した亀甲船の模型が、近代民族運動館では、まだ幼ささえ残した顔で映っている義兵部隊の写真や安重根（アン・ジュングン）の血書が、三・一運動館では 1919 年の独立宣言書や「大韓独立万歳」を叫びながらデモする民衆の写真はもちろんだが、苛烈な弾圧（日本・中国・韓国によって共同編集された『未来をひらく歴史』（高文研、2005 年）によると、死者が 7 千名負傷者が 4 万 5 千名を超え、投獄者は 5 万名近くに上ったという）によって死んだ、私などが名前さえも知らぬ独立運動家の遺品にも胸が痛んだ。

しかし七つの展示館でもっとも印象深いのは、やはり日帝侵略館である。この館では、日本が植民地支配下で行ったとされる拷問場面が、蝋人形によって生々しく再現されており、「見る」ことへの意志がなければ見るのがつらい展示が続くことになる。照明の落ちた場所で細長いガラス窓から覗くと、「棒ひねり」（縛った足の間に棒を入れてひねりあげる）「空中戦」（後ろ手に縛り天井からつるして棍棒で殴る）「水責め」（椅子に縛って無理矢理ヤカンの水を飲ませる）といった血生臭い拷問場面が現れるのである。さらには、独立運動家や共産主義者に対する処刑や虐殺場面の写真もある。昔『写真記録日本の侵略：中国朝鮮』（ほるぷ出版、1983 年）や『写真図説日本の侵略』（大月書店、1992 年）などによって、目を覆いたくなるような写真の数々を見てはいたが、「われらが他者」の展示として見せられるとやはりその印象は強烈である。私も四方田のようにこうした展示を「イデオロギーを離れた角度から眺め、そのシステムを批評的に見つめ」たいと願いはしたものの、私の「歴史的時間」はそうした冷静さをどこか失わせいたように思う。

若い学生諸君などには、日本が本当にこんな酷いことをしたのかと訝る向きもあるかもしれない。しかし、ワーキングプアの間で爆発的に読まれ、今日までに総計で100万部近くを売り上げたという「蟹工船」の著者小林多喜二は、1933年2月20日に逮捕されその日のうちに「残虐の限りをつくした」拷問によって虐殺された（ここに紹介するのも躊躇われるような惨状については、神津拓夫『作家その死』（近代文芸社、2008年）などを目を背けずに読んでもらいたい）。3人が獄死させられた横浜事件でも、「小林多喜二の二の舞を覚悟しろ」と独立記念館の展示同様の拷問が繰り返されていたのである（美作太郎他『言論の敗北』（三一新書、1959年）や松本正雄「横浜事件」（『ドキュメント昭和五十年史4』汐文社、1975年所収）を参照のこと）。国内においてさえこうした現実があったのであれば、「隣国なるが故にとて特別の会釈に及ばず」（福沢諭吉）と「脱亜」を掲げた「われら」が、「われらが他者」の地で、抵抗運動を根絶やしにすべく徹底した弾圧、拷問、虐殺を大規模に繰り広げたであろうことは想像に難くない。

しかしながら、現代の日本では「日韓併合は、会社で言えば『対等合併』。朝鮮人にも日本人と同じ権利を与えたんです」などといった元航空幕僚長田母神俊雄のようなうそ寒くなるような言説があり、そんな彼の講演がなかなかの人気なのだという（『朝日新聞』2009年5月3日）。「日韓併合」などではなく、事実に即して「韓国併合」と呼ぶべきであると指摘し、朝鮮植民地化のプロセスを明らかにした歴史家の研究が、きちんと踏まえられるべきではないのか（海野福寿『韓国併合』岩波新書、1995年）。宝島社などは、売れると見たのか、元航空幕僚長の著作を出版してそうした主張の普及に一役買ってさえ出たのであったが、出版社としての廉恥のかけらもない所業である。これもまた「歴史的時間」を失った「大衆消費社会」の見るに堪えない一齣であるが、そうした冥く哀しい現実から「われら」は目を背けてはならないのだろう。

民主の「聖地」光州へ

3月17日には、ソウルから4時間ほどかけて、民主化運動の「聖地」と呼ばれるようになった光州を訪ねた。以前「光州暴動」と報道された光州事件は、すでにその見直しと再評価が進められて、今では市の「5・18 宣揚課」が作成したパンフレットにも「民主化を求めて立ち上がった市民の蜂起」であり、その後軍事独裁体制を崩壊させ文民政府を誕生させる大きな契機となったが故に、「韓国現代史の民主主義発展史に不滅の金字塔を打ち建てた民権闘争」と位置づけられている。1979年の朴正熙暗殺、「ソウルの春」の出現、粛軍クーデター、戒厳令布告、野党指導者の逮捕と続く事態の急変のなかで、全羅南道の抵抗拠点であった光州では、80年5月18日に陸軍空挺部隊と学生との間に自然発生的な衝突が起こる。

錦南路（クムナムノ）での学生たちのデモに対する容赦ない弾圧、激昂した市民も加わっての

大規模な抵抗、空挺部隊による血生臭い一斉射撃、武器庫の奪取と市民軍の組織化、軍の一時撤退と光州市の包囲、収拾対策委員会の分裂、闘争派の道庁占拠による徹底抗戦、5 月 27 日未明数千名の部隊の戦車での市内侵入と武力鎮圧、こうした経過をたどって光州事件は幕を下ろしたのであった。2006 年までに政府による補償を受けることができた人数は、死者 258 名、行方不明者 76 名、負傷者 3417 名、連行・拘禁者 1383 名である。しかし申請者数はこれを大きく上回っており、軍による大規模な弾圧の常ではあるが、行方不明の申請などは 405 名（補償者を含む）にも達している（全南大学 5・18 研究所の資料による）。こうした現状は、過酷な弾圧の事実が国の内外で長期にわたって隠され続けてきたことと無関係ではあるまい。光州事件の真相はまだ解明されてはいないとされる所以である。

こうした光州事件の輪郭については、先の『韓国現代史』や『ソウルの風景』、全南大学 5・18 研究所から事前に社研に送られてきたパンフレットやＤＶＤ、それに映画『光州 5・18』などでひととおりは認識していったつもりであったが、しかしそれはもしかすると、知的な傍観者としての「整理」と「理解」と「解釈」にとどまっていたかもしれない。先のような「知のシステム」のもとで行われている知るという行為は、客観的な装いをまとった退廃と紙一重と言うべきなのだろう。我々はまず全南大学の 5・18 研究所を訪問して事件の当事者でもあった呉在一（オ・ジェイル）教授から話を聞き、国立 5・18 墓地を訪れて献花した後、写真資料展示館で当時の生々しい資料を目にし、旧墓地そして 5・18 記念財団と巡った。批評の目を失ってはならないと自戒してはいたものの、「歴史的時間」と遭遇しているとの気持ちの高ぶりを押さえることは難しく、単細胞な私の感情は掻き乱されてしまうのであった。

わざわざ日本から「聖地」を訪れるような「立派」な「民主」の人士として遇されたこともあったのだろう、記念財団では『*We Saw*』と題した分厚い写真集、*Hong Sung Dam* の光州事件をテーマにした立派な版画作品集、「記憶を記憶しろ」と題した 10 日間の記録のＤＶＤ、民衆の闘いを讃えた歌を収録したＣＤなどをもらった。土産などとは簡単に言いかねるような土産である。そのずっしりとした重さに、光州事件が韓国社会に与えてきた衝撃の大きさを感じたし、また政府の支援を受けた歴史の見直しが本格的に進められていることも、強く印象づけられることになった。それと同時に、こうした多大の犠牲のうえに花開くことになった「民主の聖地」のようなところには、いささか気軽に訪ねたりしてはならぬのかもしれぬとの思いも、かすかながらよぎった。そしてまた、できたら錦南路あたりをひとりぶらついて、露天の飲み屋ででも酒をあおりたくなっていた。

ところで、呉さんはきわめて興味深い人物として『ソウルの風景』にも登場する。そうした人物の話を、事件の発端となった全南大学で直接聞いている自分がいるというのが何とも不思議だ。聞けば呉さんは地方行政や地方財政の研究者で、日本の自治労の仕事がらみで社研所長

の町田さんとも親しい間柄なのだという。文学好きの町田さんからあれこれの情報を入手している私としては、何とも嬉しい限りである。世界は予想外に狭いと言うべきだろうか。彼の話をここで詳述することは避けるが、その内容をさらに敷衍した講演記録(「1980 年 5 月　光州事件、その後の経過と現在」、『中央大学社会科学研究所年報』第 2 号、1998 年）が彼にはあり、それが当日配布された。この講演記録ができあがるについては、当時中央大学の教員だった伊藤成彦さんの尽力があったのだという（伊藤成彦『闇を拓く光』（御茶の水書房、2000 年）の冒頭には、光州蜂起 20 周年を記念して開かれた全南大学 5・18 研究所主催の国際シンポジウムにおける伊藤さんの講演記録が収録されている)。

呉さんの講演記録を読んで興味を抱いた箇所が二つある。一つは、彼が「光州事件で言いたい最も重要なポイント」としてあげた点、すなわち「戒厳軍の蛮行に抗議し、自発的に生じた偶発的な市民の自己防衛行為」であった光州事件には、事件を引き起こそうと意図した「組織」も「首謀者」もなく、そのために、「誰も光州事件の全貌を見ることができない」という点である。全貌を正確に把握することの難しさとともに、コミューンと化した美しき「光州の五月」を、我田引水の物語として語ることの危うさをも指摘しているのである。もう一つは、「学生など知識人は、状況を把握しているだけに、本当に危険な時には逃げ出しちゃうんですね。実際、僕もそういう経験をしました」と述べているところである。逃げ出した彼には、整備されて死者が「烈士」として祀られた国立墓地よりも、惨たらしい遺体が最初に埋葬された旧墓地こそが、自分が死者を悼むべき場所だとの思いがあるのだろう。逃げ出したにきまっている私にできたことは、ただ黙って墓石を見つめ、そっと手で触れてみることだけであった。

映画『光州 5・18』について、キム・ジフン監督は「無知だった自分を懺悔する気持ち」でこの映画を制作したのだと述懐するとともに、「一般の人々が流した血や汗があったからこそ今の平和がある」と強調し、また「出演者やスタッフが犠牲者を悼む心を共有」したうえでこの作品は撮影されたのだと述べている (『情況』2008 年 9 月号所収の同監督へのインタビュー記事)。「われらが他者」の今日を築いた原点を知るうえで、この映画が日本で公開された意義はきわめて大きかったと思うが、平和な時代に育った都市部の若者を取り込み商業映画として成功させるために、恋愛や家族愛を絡めた人間ドラマを強調したり、コミカルな登場人物をあえて配した手法には、賛否両論あったという（この映画に関する批判については、『情況』2008 年 9 月号所収の鵜飼、小野沢論文や『インパクション』164 号所収の文論文を参照されたい。いずれもいささか衒学的な議論の運びで、読み続けるのに難渋させられるのではあるが…)。

この映画の徹底した批判者である文富軾（ムン・ブシク）は、「映画は、暴力の正体についても語らなかったし、抗争側の内部で進行した武装と非武装とのあいだの激しい論争についても語らなかったし、暴力の前に立たされた人間の躊躇と葛藤、恐ろしさについても語らなかった

し、その 10 日間の光州の内外をめぐる固い沈黙についても語らなかった」と述べる。光州事件は、事件そのものではなく映画的な「物語」に作り直されているということなのだろう。文は、国家補償も名誉回復も過去事清算も、すべて「国民的和解への奉仕を目的とする『スペクタクル』」にすぎないと断じており、そこにはいささか厳しすぎるかもしれない批評精神がある。ただ私が溜息混じりに感じたことは、わが国においては先のすべてが放置され、無視され、封印されたままであり、「スペクタクル」さえどこにもないということであった。「進んだ」日本は「遅れた」過去をひきずっていると言うべきであろうか。いや、「進んだ」などといった形容詞の軽佻浮薄ぶりをこそ、われわれは問題にすべきなのかもしれない。

交錯する「現在」と「過去」

光州事件からはや 30 年近くが経とうとしている。1988 年には盧泰愚が光州事件を「民主化のための努力」と認めるとともに、全斗煥が当時の軍の行動を国民に謝罪して隠遁し、95 年にはこの両者が拘束されて 5・18 特別法が成立した。こうして、国家によって「過去」の清算が進められてきた光州事件であるが、「聖地」への民衆の巡礼は続いており、真鍋祐子は「はたして宴は終わったのか」と問う（『光州事件で読む韓国』平凡社、2000 年）。80 年代の民主化運動を記憶しようとした黄晳映は『懐かしの庭』で「あの時代を無名のままに生きた人々の堂々たる青春を、どうして忘れることができようか」と書いたし、事件当時市民収拾委員として活動し、我々が訪問した全南大学の 5・18 研究所を設立した宋基淑（ソン・ギスク）は、「問題は本当の加害者」であり「5・18 を引き起こした上層部の問題は政治的に曖昧にされたまま」（『光州の五月』藤原書店、2008 年）だと言い、先の文富軾は狂気の時代を振り返りつつ、「誰もすまないとは言わなかった」（『失われた記憶を求めて』現代企画室、2005 年）と指摘している。

このようにして、たとえ国家によって清算がなされたとしても、そうした制度化された清算を超えて、光州は繰り返し繰り返し民衆の側から思い返されることになる。こうした過去に向けての新たな眼差しは、さらに遠く朝鮮戦争にまで遡っていく。韓国の歴史の清算に取り組む金東椿（キム・ドンチュン）は、「韓国人の記憶のなかにある戦争のありのままの姿」を解明するために、朝鮮戦争に現れた「避難、占領と虐殺の政治」としての側面に注目する。しかも戦争のそうした側面、すなわち「国家によって、追われ、動員され、そして殺された名もなき人々の経験としての戦争」には、日本による「植民地支配体制と深い連続性あるいは因果関係」（『朝鮮戦争の社会史』平凡社、2008 年）があるというのである。「われらが他者」の世界を舞台にしたこの戦争をスプリングボードにして、「われら」は高度成長から「大衆消費社会」への軌道をまっしぐらに驀進していったのであった。もちろん、「すまない」などとは一言も言うこともなくで

ある（反省らしき言葉が国会決議に盛り込まれたのは、戦後 50 年も経ってからであった）。

ドイツにおける過去克服のための努力はよく知られているが、近年他の国々でも歴史の見直しが進められてきている。韓国については先にふれたが、スペインでも 2007 年に「歴史の記憶に関する法律」が制定されている。それによれば、スペイン内戦やフランコ独裁政権の下で政治的、思想的な理由によって迫害された人々に対して、その刑罰や人権侵害の不当性を宣言し、名誉を回復する権利が認められ、犠牲者や遺族に年金や賠償金が支給され、犠牲者の発見や遺体の発掘を国が支援するというのである。翻ってわが国の現状を眺めてみれば、先の小林多喜二の虐殺や横浜事件での弾圧をはじめとした、戦前の治安維持法体制下で犠牲となった人々に対して、謝罪も、名誉回復も、補償もない。戦後のレッド・パージについても同じであるし、国鉄の分割・民営化に反対したが故に、20 年を超えて職場を追われ続けている国鉄労働者もそうした流れのなかにある。

戦争の最高責任者（軍の統帥権を持つ大元帥陛下）であり、戦争指導をも行ってきた昭和天皇の戦争責任を問うこともなく、退位すら求めなかった政府は、国際裁判の判決を受けても「犯罪」とは認めず、政府による戦争責任追及も放棄して、過去に目を覆ってきたのであった。こうした社会において過去を問い直そうとすることは、たとえ愚直ではあってもきわめて貴重な営為に違いない（吉岡吉典『総点検日本の戦争はなんだったか』（新日本出版社、2007 年）は、丹念な資料の整理をもとに、明治以来の日本の戦争が侵略戦争であったことを明らかにした興味深い著作である）。独立記念館や光州が「われら」に問うていたのも、そのことではなかったか。以前、靖国神社にある「遊就館」を吉澤、黒田両氏とともに訪ねたことがあったが、そこは「記憶や記録に対する真摯な姿勢に欠けるだけでなく、どういう教訓を学んだかを戦死者に伝えて慰霊する礼儀にも欠けている」（保阪正康「薄れる記憶、ゆがむ記録」、『朝日新聞』2007 年 10 月 1 日）ような、何とも古色蒼然たる暗鬱な場所に過ぎなかった。「われらが他者」の「歴史的時間」と向き合うことなくして、「われら」の過去は新たに記憶し直されるべき過去へとその姿を変えていくことはないのだろう。

3 月 20 日帰途のため釜山空港に向かう途中、朝鮮戦争最大の激戦地と言われ、おびただしい若者の血が流されたという釜山近郊の大河洛東江（ラクトンガン）を渡った。周到な計画と準備の下に決行された 1950 年 6 月 25 日の北朝鮮人民軍の「武力南進」によって、首都ソウルはあっという間に陥落し、米韓連合軍は 8 月には釜山橋頭堡にまで追い詰められて、両軍は洛東江で対峙したのであった。金日成は「祖国解放」のために突撃命令を出して渡河作戦を決行したのであるが、戦線が延びきって武器の補給も欠いた人民軍も多大の犠牲者を出し、江と江畔に累々たる死者が重なりあう凄惨な戦闘になったという。まさに「史上最大の戦場」である（萩原遼『朝

鮮戦争』文春文庫、1997 年。朝鮮戦争を描いた韓国映画に、1976 年の『史上最大の戦場　洛東江大決戦（現題は「洛東江は流れるのか」）』（監督は韓国映画界の巨匠イム・グォンテク）や 2004 年の『ブラザーフッド』（監督はカン・ジェギュ）などがある）。

車窓から眺める洛東江は、豊かな水量を懐に抱え、まるで時空を超えたかのように悠々と流れゆくばかりである。遠く太白（テベク）山脈から湧き出たせせらぎは、500 キロを超えた長い旅路の涯に大河へと姿を変えて、東海に還ってゆくのであった。一方では「生活の細部」に立ち入りながら、他方では過去の記憶に分け入る、そうした二つの視線が互いに交錯し、現在＝生者と過去＝死者が互いに行き来するところに、無名の人々として生きる「われら」と「われらが他者」にとっての真実はあるのかもしれず、そしてまたそこには、「やり場のない哀しみと果たされなかった夢への憧憬」に寄り添うとともに、「新たな再生の力を与え」（チェ・キルソン『恨の人類学』（平河出版社、1994 年）の訳者真鍋祐子のあとがき）もするような「恨」（ハン）と呼ばれる感情が息づいているのかもしれない－冥さと哀しさに彩られた旅の終わりの感傷を振り切ろうとして、私はふとそんなことを思った。